

# 金属を通して歴史を観る

## 8. 和同開珎とインフレ

新井 宏

日本金属工業(株) 顧問

今年の1月20日の朝日新聞に「最古の通貨は富本銭・和同開珎説覆る」と衝撃的なニュースが載った。奈良県明日香村の飛鳥池遺跡跡から「富本」の文字のある7世紀後半の銅銭が33点と、その铸造遺跡が発見されたのである。和同開珎が発行されたのは和銅元年(708)であるから、確かにわが国の通貨史を覆す大発見である。

ところで「富本銭」は、今回初めて見つかったであろうか。いやそんなことはない。今から13年前の昭和61年3月19日の各新聞にも、平城京右京から「富本銭」が見つかったニュースが大きく載っていたのである。新発見は新聞によって繰り返し作り出される。

もっとも今までは、富本銭は厭勝銭(厄除け用)であり、一般通貨としての目的があったかという点では疑問もあった。しかし天武朝の中枢地から多少まとまって出土したことから、日本書紀の天武12年(683)の記事「必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いること莫れ」が注目され、通貨としての意図が明瞭にあったと考えられるようになったのが収穫であった。とはいうものの、流通量は間違いなくわずかであり、実質的な日本最初の通貨は、やはり和同開珎なのである。

さて主題の和銅開珎については、すでに一般向け成書が数多くある。藤井一二氏の『和同開珎』をはじめとして、三上隆三氏の『貨幣の誕生・皇朝銭の博物誌』、東野治之氏の『貨幣の日本史』などの他、

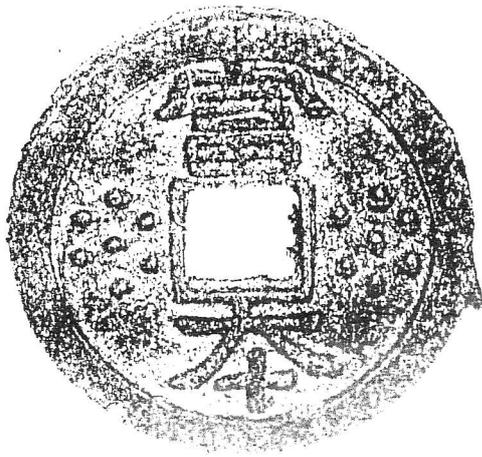
やや専門的になるが滝沢武雄氏の『日本の貨幣の歴史』、栄原永遠男氏の『日本古代銭貨流通史の研究』などである。どの本も「お金」の本だけに、読んでいて大変に面白い。本稿も結構これらの成書を利用して書いているのであるが、一般書とは言え、各著者の「学説」が随所に顔を出しており、それとの対話は刺激的である。

### 狩谷掖斎と和同開珎

いまさら、素人の私が「和同開珎」に新たな考えを出そうというほどでもないのであるが、わが愛する狩谷掖斎も絡んだ話なので、寄り道を許していただきたい。

狩谷掖斎、江戸時代後期の豪商、漢学者・国学者・考証学者・言語学者・計量学者にして名書家でもあった。江戸時代にあつて、掖斎ほどに科学的な考証に徹した学者がいたことは、真に驚くべきことである。森鷗外が、掖斎の伝記執筆を志しながらついに果せなかったことを知って、できることなら自分の手だと思っていたところ、先年、吉川弘文館の人物叢書に梅谷文夫氏が綿密な考証のもとに『狩谷掖斎』を上梓した。ちょっと残念であるが、ほっとしてもいる。

私が敬愛する理由は、もちろん彼の『本朝度量権衡攷』の素晴らしさにある。昭和になって出された計量史のバイブル・藤田元春氏の『尺度綜考』など、現在の知見からすれば、掖斎の足元にも及ばないほ



どである。

さて、その狩谷掖斎が和同開珎について何を言ったか、彼は「和同開珎」を「和銅開寶」と読んだのである。今では「和同開珍」と読むのが主流であるが、「和同開寶」と覚えている方も多くであろう。掖斎は、珎の字の右側を、寶の字の「ウ冠」と貝をはずした略字と見立てたのである。誠に卓見ではあるが、現在は非勢である。しかしこの論争に深入りしている余裕はない。

秩父郡から和銅(自然銅)が出たことで、慶雲5年(708)に年号が和銅と改まった。そしてその年の5月に銀貨が、さらに8月に銅貨が発行されている。和同開珎の銀銭と銅銭である。すなわち、和銅ではなく和同であり、銅貨ではなく銀貨が先に出されたのである。しかも、その銅銭は秩父の和銅が使われたわけではなく、近江国に命じて铸造させたものであり、原料の銅は長門国の長登鋤山の銅、すなわち東大寺の大仏と同じ銅が用いられたのである。そのため、和銅と「和同開珎」は直接的な関係はなく、「和同開珎」は和銅年間の前から存在していた可能性さえ指摘されているのである。

通説と異なるこのような見解には、わくわくする思いがあるが、こんな紹介を続けていては、自説の紹介がなかなか始められない。私の興味の焦点は、和銅開珎がどのような「価値」で発行され、どのような「価値」で用いられ、皇朝十二銭とはどんな関係を持ち、いかにして廃れていったかである。

### なぜ銀貨が先に発行されたか

和銅開珎ではなぜ銀貨が先に発行されたか。それは和同開珎に先立ち、無文銀銭がすでに流通してい

たからである。その無文銀銭は、大津市の山中の崇福寺の埋納孔から発見された11枚の他、5カ所から各1枚見つかっているが、そのうち特に大型の35.7グラムのもを除くと、ほとんどが9グラムから10グラムであり、重さを調整するための小銀片が貼付されているものが多い。この重さは、当時の計量単位の大兩(約37.5グラム、小兩の3倍)の4分の1すなわち大兩の一分に一致しており、大型の無文銀銭を大兩の重さと見れば、地金価値を基にした半計數通貨であったと考えてまず良いであろう。一方、和同開珎の銀銭は平均しても9グラム前後である。これらの事実は、和同銀銭が国家の刻印(?)により、銀一分の価値と等価を付与されたことを意味している可能性が極めて高い。約40%の出益であり、案の定、直ちに私鑄銭が現われた。私鑄銭の場合、正規の6グラムをさらに軽量化したり、純度を落としたりすることで大きな利益を出すことができたはずである。

### 銅銭と銀銭の比価

和同開珎の銀銭発行の3カ月後に、銅銭が発行される。この時、銀銭と銅銭の価値比率がどう決められたか、史書は何も伝えていない。そのため、学者はきわめて慎重である。膨大な論文を書きながら、こんな重要なことにちゃんと触れていないか、思いつき程度の表現に留めている。慎重さは良いとして、最も基本的な項目について考察が不十分なのは一種の無責任さでもある。それなら私の出番である。和銅開珎の銀銭と銅銭の動きを簡単にまとめてみよう。

- 和銅元年(708) 5月 銀錢発行  
8月 銅錢発行  
和銅2年(709) 1月 銀錢私鑄の厳罰布告  
3月 4文以上の売買には銀錢, 3文以下には銅錢を用いること  
8月 銀錢を廃止し, 流通貨は銅錢のみとすること  
和銅3年(710) 9月 銀錢の禁止  
養老5年(721) 1月 銀錢・銀地金の流通を再許可し, 銀錢1枚を銅錢25枚, 銀地金1両を銅錢100枚と設定  
養老6年(722) 2月 銀地金1両を銅錢200枚と改定

このような経過で, 養老5年には銀錢と銅錢の比が25となり, ついで翌養老6年に50となったことは判っているが, 肝心のスタート時点については, 和銅2年3月の規定から銀錢1枚が銅錢4枚に相当するという説, 天平寶字4年(760)の大平元宝(銀貨)と万年通宝(銅貨)の比が10であったことから, 銀錢1枚が銅錢10枚であったとする滝沢武雄氏の説, 榮原永遠男氏の銅錢10枚を念頭に置きながら「より慎重な」変動相場を示唆する説, あるいは元々最初から銀錢1枚が銅錢25枚に相当していたとする説までさまざまである。

榮原氏が言うように, 養老年間になると銀錢と銅錢の間には, 実勢価格として変動相場が成り立っていたことは想像に難くない。したがって養老6年の規定が実情追認であったとすれば, 養老5年の規定はその当時政府が望んだ比率であったと考えられよう。しかし, 和銅元年の当初から変動相場であったとは絶対に考えられない。なんとなれば, 当時の銀銅比価は, おおよそ80~100倍であり, 銀錢と銅錢の重量差も加味すれば, 地金価値としては100倍以上の差で, これを変動相場にまかせるなど有り得なかったからである。和銅の律令政府は, 無文銀錢の4分の1両(1分:約10グラム)に準じた価値を与えた和銅銀錢(約6グラム)の權威のもとで, 地金的には遥かに安価な銅錢に計数通貨価値を与えようとしたのであり, 銀銅錢貨比を公定しなかったはずはないのである。かくして榮原氏の慎重な立場は消える。しかも, いったん銀錢とのリンクによって, あたかも銀本位制度を装いながら, 1年後には銀錢を廃止してしまう。これが計画的な(犯罪)行為とまでは言わないが, 小利口な政策担当者の見え見えな政

策であったとも考えられるのである。学者はこんなふう想像をたくましくするわけにはゆかない。だからさっぱり意味が伝わってこない。銀錢1枚に対して銅錢4枚の説は, あまりにも銅貨に価値を与え過ぎており, 成り立ち難いであろう。銀錢1枚に銅錢10枚というのが常識的な結論と思われるが, それにしても, これはあくまで当時の史料検証によって判定すべきことである。

## 和同銅貨は紙幣と同じだった

そのためには, 当時銀地金がどのような価値を有していたか, そして和銅の銅貨を発行した頃, 当時の政府は銅錢をいかなる価値に位置づけたかを調べるのが重要である。

すでに金属比価推移のところの一部述べたが, 奈良・平安時代に銀地金の価値を米, 絹等との関係で述べた史料には次の3点がある。

① 天平元年(729)の兵衛の資材の基準が, 銀2両で上絹1疋, 銀1両で庸布4段, 米1石である。

② 天平寶字2年(758)の『観世音寺奴婢帳』では「充直稻壹千二百束准銀三十兩」など, すべて銀1両を稻40束に対応させている。稻20束で米1石であるから, この場合は, 銀1両米2石に相当。

③ 『延喜式』の主計上によれば, その調を正丁1人当たり米6斗, 銀1分(4分の1両)と定めている。銀1両当たり米2.4石と等価である。

以上の資料を追いかけてみると, 銀の価値が時代とともに上昇気味にあるようである。その点を考慮して, 和銅の頃の比価を, 銀1両で米1石と考えてみよう。

一方, 和同開珎発行の直後の, 和銅4年(711)と和銅5年(721)に, 律令政府は「穀六升錢一文」, および「布一常五錢」との規定をおこなっている。穀6升は米3升であるから, 1石では33文である。また布1常は2分の1段であるから, 4段は40文である。

前述したように, 銀1両は和銅銀錢4枚であるから, 両者の関係を対比すると, 米価からは銀錢1枚で銅錢8枚, 庸布価からも銀錢1枚で銅錢10枚の換算比が与えられる。かくして, 和同開珎が発行され

た当時は、「銀錢1枚が銅錢10枚に相当した」ことは確実となる。ここまでの論証のプロセスは、ごく常識的であり、しっかりデータさえ調べれば自然に至る結論である。専門家がなぜこんな簡単な論証を怠っていたのか、やはり計量単位に不案内のせいなのであろうか。

さて、それでは和銅の律令政府の政策の特徴は何にあったのであろうか。その最大の特徴は、世界各地の自然発生的な貨幣（必然的に地金価値とは切り離せなかった）とは異なり、和銅の銅錢の場合、発行当初から地金価格とは無関係な「紙幣」のようなものであったことである。これは律令政府が「打出の小槌」を入手しようとした壮大な実験であった。しかし純分価値で6割の和同開珎の銀錢でさえ、直ちに私鑄錢が現われたのであるから、和同開珎の銅錢にも私鑄錢が現われなかったはずがない。結局のところ、当初1石33文に設定した米価は、50年後には500文にまで値上がりしてしまった。いや、値上がりしたと言ってもは誤りである。銅錢の価値が私鑄錢などの存在で地金価値の近くまで下がってしまったのである。「頃者私鑄緒々多くして偽濫すでに半ばす」の状況だったのである。

## 皇朝十二錢と億倍以上のインフレ

これでは、律令政府の当初の意図は全く実現しえない。そして、天平宝字4年(760)皇朝十二錢のトップをきって、万年通宝(銅貨)、大平元宝(銀貨)、開基勝宝(金貨)の3貨が発行されるのである。この時の万年通宝は、品質・形状・重量は和同開珎と全く同じでありながら、万年通宝1枚が10枚の和同銅貨と等しいとされ、以下銀貨の大平元宝は10枚の万年通宝、金貨の開基勝宝は10枚の大平元宝に等しいと決められた。新羅征討の軍資金捻出が目的であったようである。

このような政策は、当然万年通宝の通貨価値を極めて不安定なものとし、折りからの恵美押勝の乱や連年の凶作飢饉により、物価を暴落へと向わせた。そればかりではなかった。万年通宝発行の5年後の天平神護元年(765)に、第2の皇朝十二錢である神功開宝が発行された。しかも、この神功開宝も万年

通宝の10倍の公定価格が与えられた。すなわち和銅の銅錢に対しては、100倍に相当することになった。これでは大混乱は免れず、私鑄錢者の好餌となり、その結果、宝龜3年(772)には、ついに律令政府は和同銅錢の使用禁止と神功通宝と万年通宝の価値を同一とする処置を執った。かくして、万年通宝や神功通宝で表示される「文」が、かつての和同銅錢の「文」に取ってかわり、かつての文の表示に近い物価水準に戻るデノミがおこなわれた。

さて律令政府はなぜこのような政策を思いついたか。それには当然ながら唐に前例があった。よく知られているように唐代を通じて開元通宝が発行され続けた。しかし開元通宝だけが通貨であった訳ではなく、万年通宝発行の2年前に開元通宝の10倍の価値に決められた乾元重宝と30倍の価値に決められた重輪乾元重宝が発行されていた。その結果、唐においても物価が20~50倍に暴騰している。

このように、銅錢は一方で紙幣のように地金価値とは切り離されて発行された歴史がある。ところが、ここが披瀝に面白いところであるが、銅錢には地金としての価値もある。銅錢が銅地金の価値まで下がれば、銅器の材料として鋳潰されてしまう。かくして新錢・旧錢あわせて示される「文」は、長い歴史の間、地域を問わず、ほぼ一定の値に収斂する傾向を見せている。実質的なデノミを繰り返しながら、時には紙幣のように、時にはあたかも金銀貨と同様、地金価値のある通貨のように振る舞っていたわけである。このことは、高額通貨がすべて紙幣に替り、硬貨が完全に補助通貨に成り下がってしまった現代でさえも、繰り返されている。ソ連が崩壊したのち、いちじるしいインフレに見舞われたロシアでは、ニッケル硬貨が地金より安くなり、地金として費やされる運命になってしまった。物価史研究において、注意しなければならないのは、このような複雑さといかに根気よくつき合うかである。

皇朝十二錢の歴史をもうすこし続けよう。神功通宝のあとにも、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝、長年大宝、饒益神宝、貞観永宝、寛平大宝、延喜通宝、乾元大宝と天徳2年(958)までの200年間に9回、計12回新しい銅錢が発行された。そのうち、万年通宝、神功通宝を含んで、7回までが、旧錢の10倍の価格

を付与されている。その他の場合も明記されていないだけで、10倍で発行された可能性が高い。おそらくこの間に1億倍をはるかに超えるインフレが起こったはずで、そのつど新文へのデノミがおこなわれた。これでは通貨が信用されるはずがない。しかもこの頃、銅の産出がいちじるしく減少していた。ここに皇朝十二銭は天徳2年(958)の乾元大宝をもって歴史の幕を閉じたのである。

律令政府が、銅銭発行による利益を求めたのは疑いない。和同開珎発行の和銅元年は、平城京造営がはじまった年であり、膨大な財政支出にせまられていた。功賃や資材代金の支払いの便もあったであろうが、主目的が資金調達にあったことはまず間違いない。はたして律令政府の目論見はどれほど成功したのであろうか。それが律令政府の財政に対してどれだけ貢献したのか知りたいが、定量的に調べた例を知らない。このような着想こそが、歴史の面白さだと思うが、放置されているのは大変もったいない話である。後日調べてみたいと思っている。

前にもふれたが、江戸の文化文政期、幕府は「一分銀」という紙幣のような貨幣を出して、当時の幕府財政収支の年200万両の10倍に近い1,800万両の利益すなわち隠れ国債を発行していた。そのため結局ペリーの開国でその高いツケを払わさせられた。平安朝では何も起こらなかったのだろうか。

通貨インフレの話に戻ろう。これは、銅銭に基礎をおいた中国や日本だけの特徴であったろうか。いや、決してそんなことはなく、地金価値に基礎を置いた金銀貨の場合でも同様であった。ローマでは当初4.5グラムの銀貨デナリウスが通貨の単位として用いられていたが、それが何時の間にか通貨の呼称単位に成り下がり、4世紀には元の500分の1にまで価値を低下させてしまっている。また9世紀になってヨーロッパで復活した銀貨デナリウス(ドウニエ)も、その後同じような経過をたどり100分の1まで価値を下げた。日本の小判すなわち両も江戸時代に10分の1まで純分重量を下げた歴史を持つ。

## 社会は金利をインフレで吸収する

インフレは世界の歴史である。金利というものが存在しない社会は別として、社会の富すなわち道路

や橋、公共施設などの社会資本の純増分に見合った金利の増分であれば、マクロに見てインフレにはならない。通貨価値が維持されるからである。しかし、社会資本の蓄積と消耗がバランスしていて、純資産の増分がないような世界では、金利分がどこからも出てこない。長期的にはインフレで帳消しにするしかないのである。それにもかかわらず人類は金貸し業とともに歩んできている。

現代は、本シリーズの冒頭でもふれたように実の経済よりも虚の経済が優勢である。日本の個人金融資産1,200兆円の金利だけで、世界中の穀物をすべて買占めできる計算になるが、そんなことは有り得ない。今や世界は、膨大な金利を払い続けることができるほど、社会資本の蓄積ができていない。いや、社会資本の充実をはるかに超えるところで虚の経済が暴れまわっている。このツケは、いずれインフレによるか、徳政令などの踏み倒しによるか、あるいは戦争により賄われなければならないのは理の当然である。残念ながら、日本の政府も、その巨大な財政赤字や不良資産問題を結局はインフレによって解消するしか方法がないであろう。それが通貨の歴史を勉強した結論である。

今、日本は厳しい不況の中でデフレ傾向にある。これがまた不況を呼んでいる。しかし、世界の歴史はインフレを指し示している。インフレは弱者(老人や子供)を襲うが、マクロに見た日本は弱者であろうか、強者であろうか。そして再び日本がインフレに向う時、日本はかつての元気をだせるであろうか。インフレとは、貨幣価値の低下のことである。インフレで一番困るのは誰か。単純明快に言えば、金を持っている者すなわち金持ちである。それから社会的な弱者である老人である。すなわち「金持ちの老人」が一番インフレを恐れるのが道理である。「貧乏人の若者」はインフレを怖がらない。ものごとを単純化して見るというのはこのようなことなのである。いま日本が超デフレにもかかわらず、インフレを恐れているのは、政権を「金持ちの老人」が握っているからである。あるいは、日本自体が「金持ち国の老人国」になってしまったからであろうか。